北廓花盛茶屋
上之巻

A525
2

<48-8328>

色之次松の操ハ谷氏の妻君が貞節弱色逸足の淡松ハ夫が苦戦の形勢を眼前のごとく其夢と吉兆ありと父親が励まず趣向も古人飾る錦の古筆ハ陸奥の戦功も恐ハ妻子と捨小舟室家の恋の玉章と消て果敢なき物語い過つる去年の落葉同四方に散る名社乃新紙と一紫二紫と拾集め綴り合せ小伏ハ淫色はしる北郭の七今と盛の桜ハ人形刺はて初緒の袋見も幼稚君の乃恋ハ入次第と結とのは詞の松に因ての松姫ハ紫ハ此紫と恋ハ人くと失つく桜ハ催促ハ結願て秀逸と取物しハ海より来学の僕敬称と失ひて迷ハ。実綾紀ハ老り出校会さんも捨きけハ。独き伝来の文字の遺ひもあつ文と二編の序り稿一く

附録となるくものハ

明治十四年五月

浦茶寺の者りよ任

春亭史彦のたん

再出
豊榮妻阿清
旧笠間藩士
谷豊暢

品川楼の娼妓盛吹

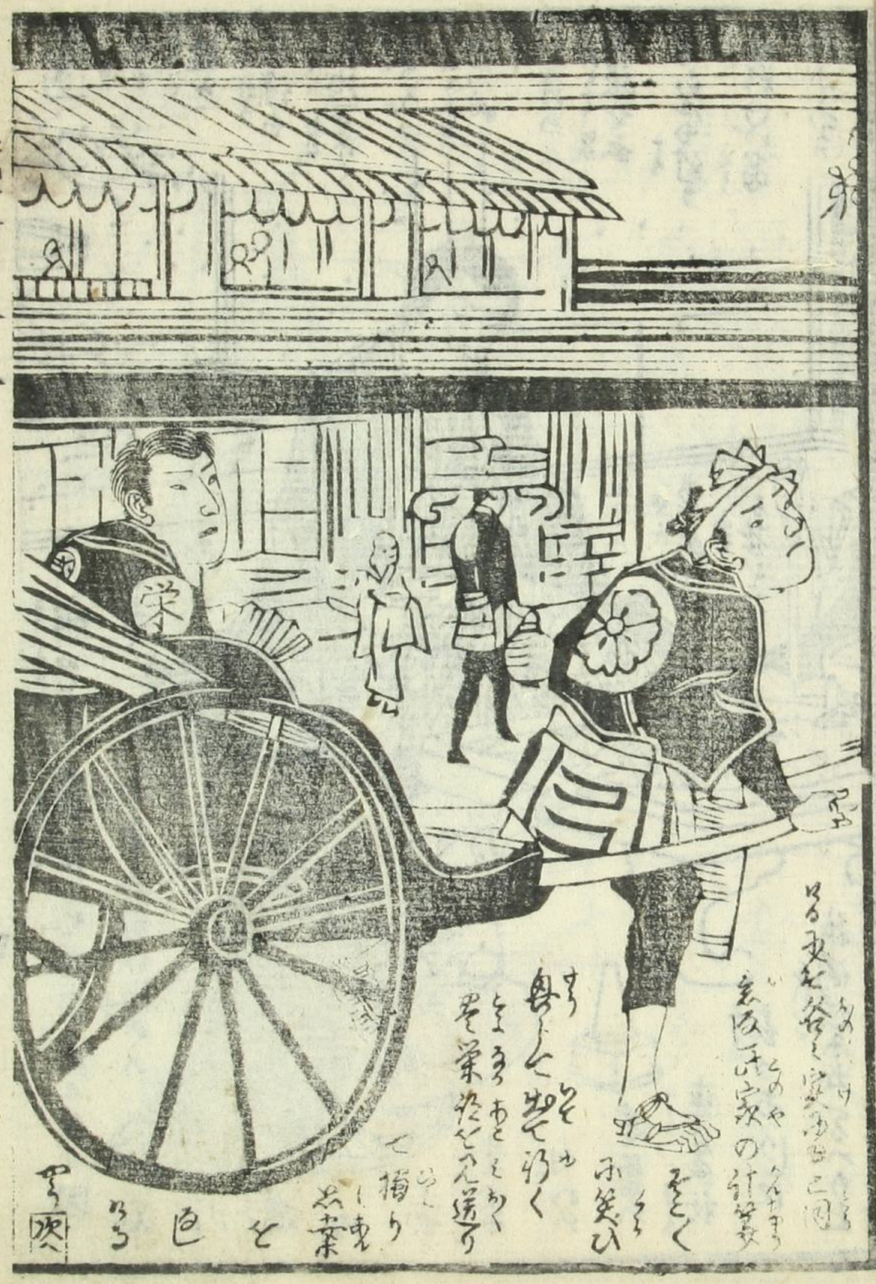
旧横港神風楼抱宮内
更二代目 盛紫

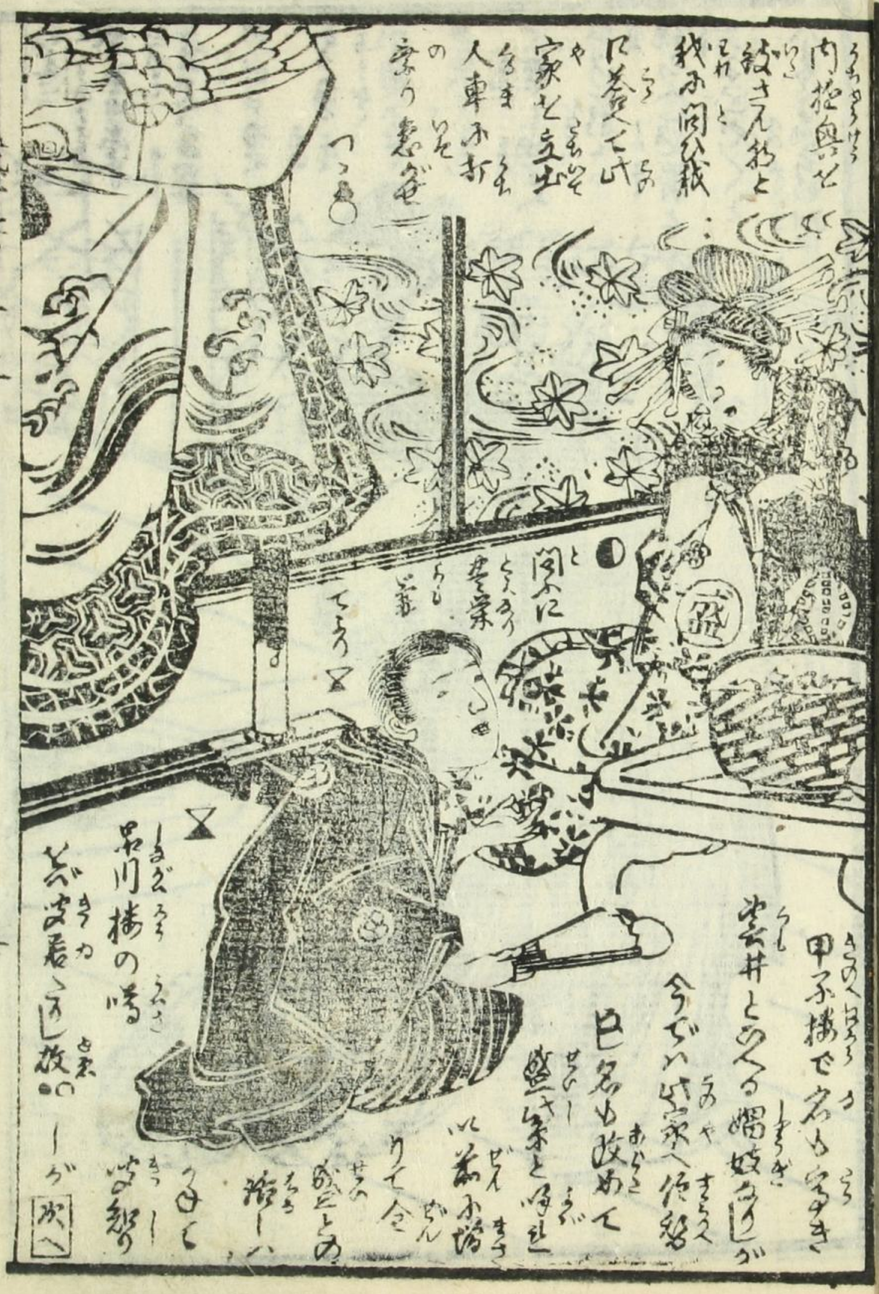
初代今つぐき

再び浅草へ出て業を盛んにせんと
思ひ立ち、今度は巡業に出
掛けて見ようと思ひ立ち
出掛けるにつけ父母と
姉あかせの所へ一下宿あらんと思ひて大坂へ
ありたんと再び張る本業を
の場所を本町橋と慢むる
業を盛家楼とする酒食と打
色々が呼ぶ所なるゆえ
勇みの達と家
ひて又もひとりに
人知れぬ或る桝
理屈なく獨敬
事を張る

区汁
やぬで呑
張る
商人
体の合
客が連と
おれ
おれ
九丹の戦
家伝一と

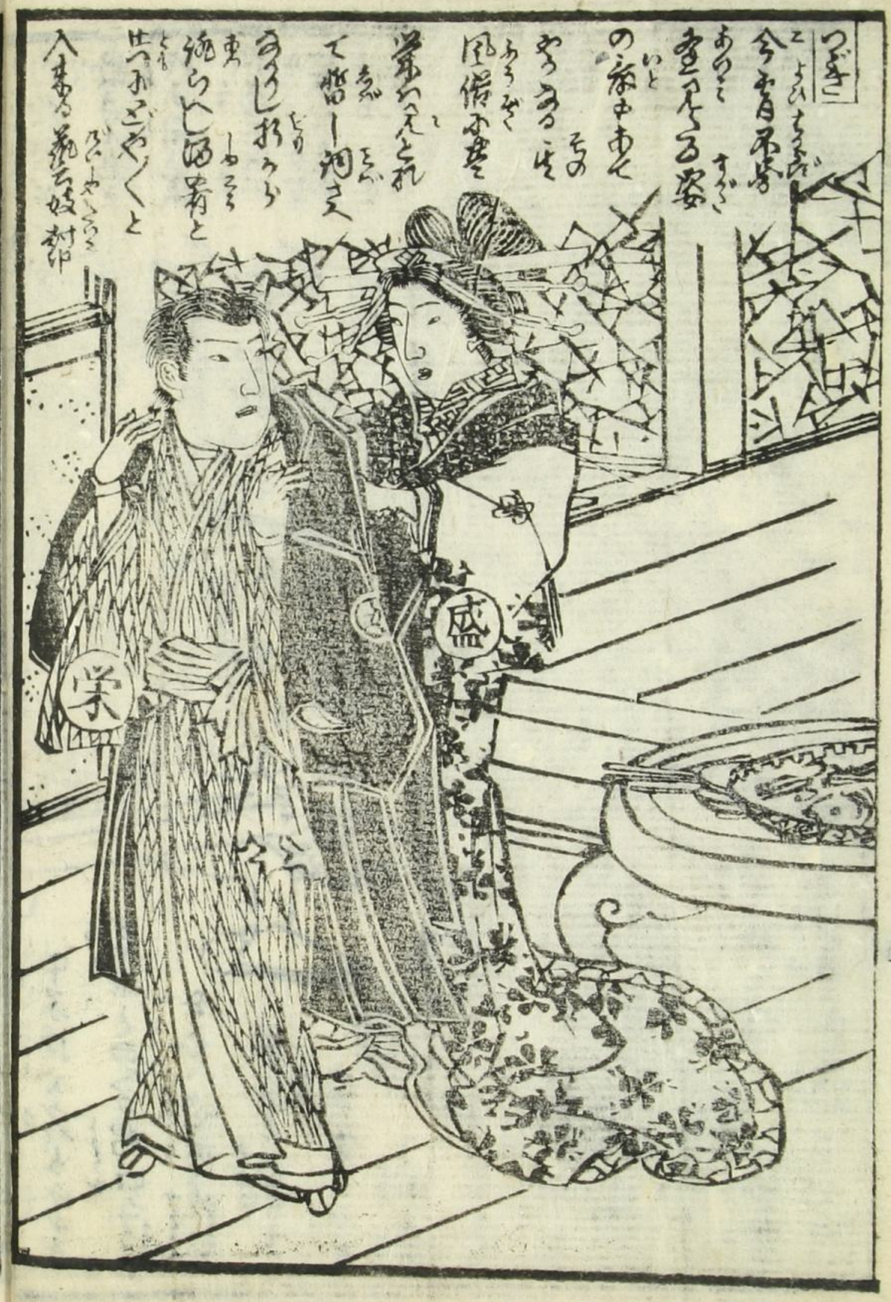
次へ





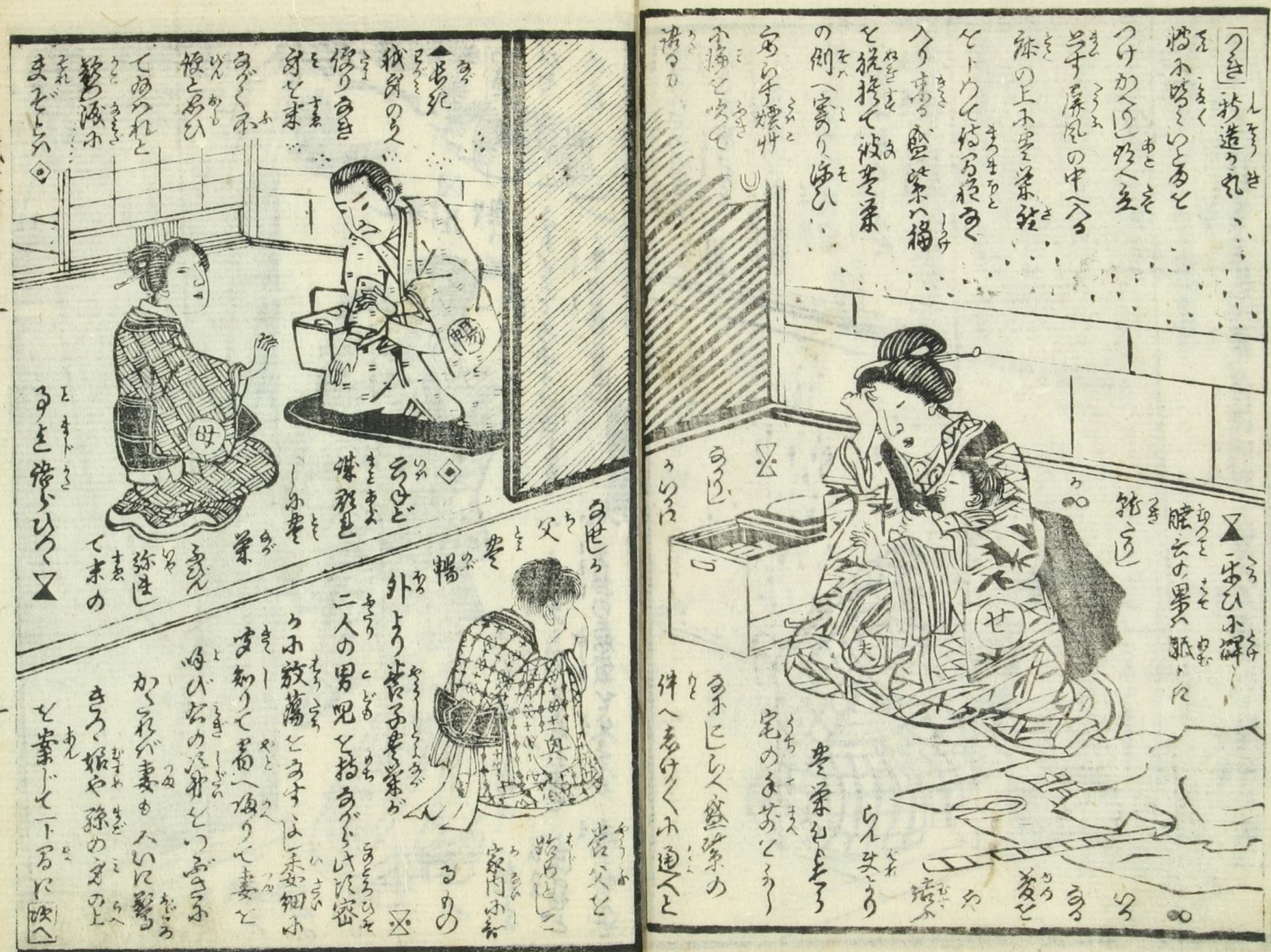
つぎ

今宵所望あること堂々たる姿の家主あて
やうなる生
風俗不埒
第ひとれ
て皆し河之
ゆうしおからぬ
絶らしし河岸と
世ふかさやくと
入まる義太夫節



同さんさめろ世大
騒きふ空ふ情
世と樹めつ余志ろく
ろ[illegible]ろと盛栄
い候へふ社とトめて
若ろ優し沈次女と見よろく
ろ方と思ひ物ろと身
に心意風ふ社て世
裏や物ふ世ふ廉らしいと
思と若世の同級ふや
野ふ網子の三下り振ふ騒
きふ安も深く背ろと張ろ[illegible]て何時しひけに成れどチトおた付と

次へ


せ
夫
母
母
父
婆
婆

つぎ
ひそ
くと
奥い
さくくてろふうけさども
年の春らは
ゼ

栄

つゞき　なごやく昔をあげゝり
不幸なる児と父母の叔ハ
此義氏是臣を側へ招き
懐くとまで勿忘して
おせいに向ひ此子の
ことをバ宜敷頼ミ
扨くれ妻を迎へ
おふさといふに
既に暢斎を養
更に清ハ我家を立出て
かまへが此身の死ばやと入る魂の家を
眼路すくとおそりに探せども汐和の

☒ そのまゝが

一 此方へ来るを清ハ
先くつくろうも
まゞ嫉しやと思ふ
忽ち其業
妻を見当り
て仰天へ行
やとあひけり
に が ぞ 清 も ☒

家でも来らぬの
名人にかけりも
惑臣ハ如何ハせんと
行くもし
奥の方
よの釜を
半兵衛
ど尽の
碑の根
子りく
見えし
途路に▲

此ていにさうあく個も
出しかず四辺を見まし
側へよりし小声に成
て父母が内と併世
事がうを吸くる
彼に是とおく家
と支出そ
路を尋ね
てかゞし
紋さんと俄
かに探し出せど
知れねバ如何ハ

次へ

北廓花盛紫　三編　切　春亭史彦作　梅堂國政画

滋賀縣美談　今常盤布施譚　三編　揃　切　松林伯圓綴　梅堂國政画

雪月花三遊新話　三編　揃　切　篠田仙果錄　梅堂國政画

書物地本問屋　東京日本橋區松島町壹番地　松延堂大西　伊勢屋庄之助版

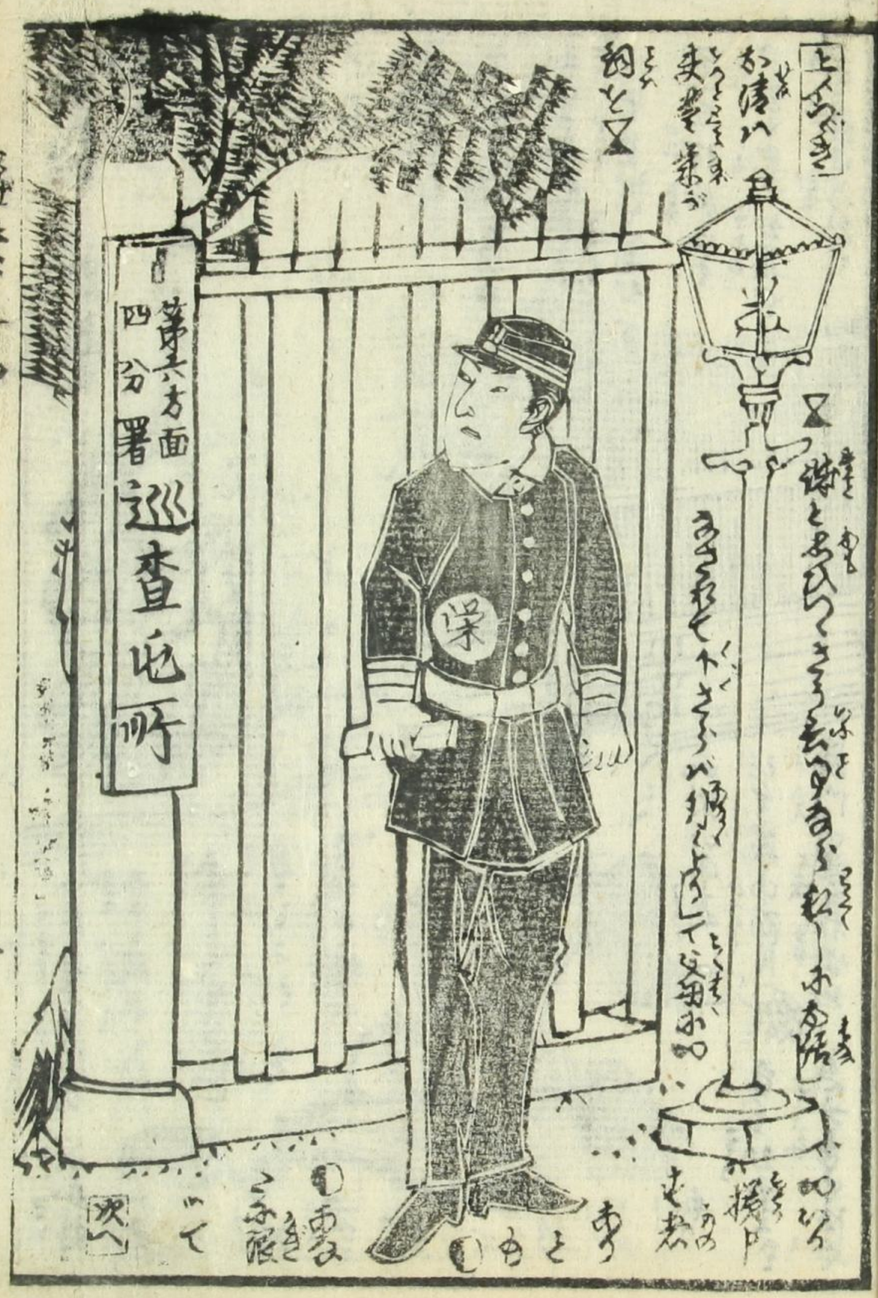
春夢史彦綴

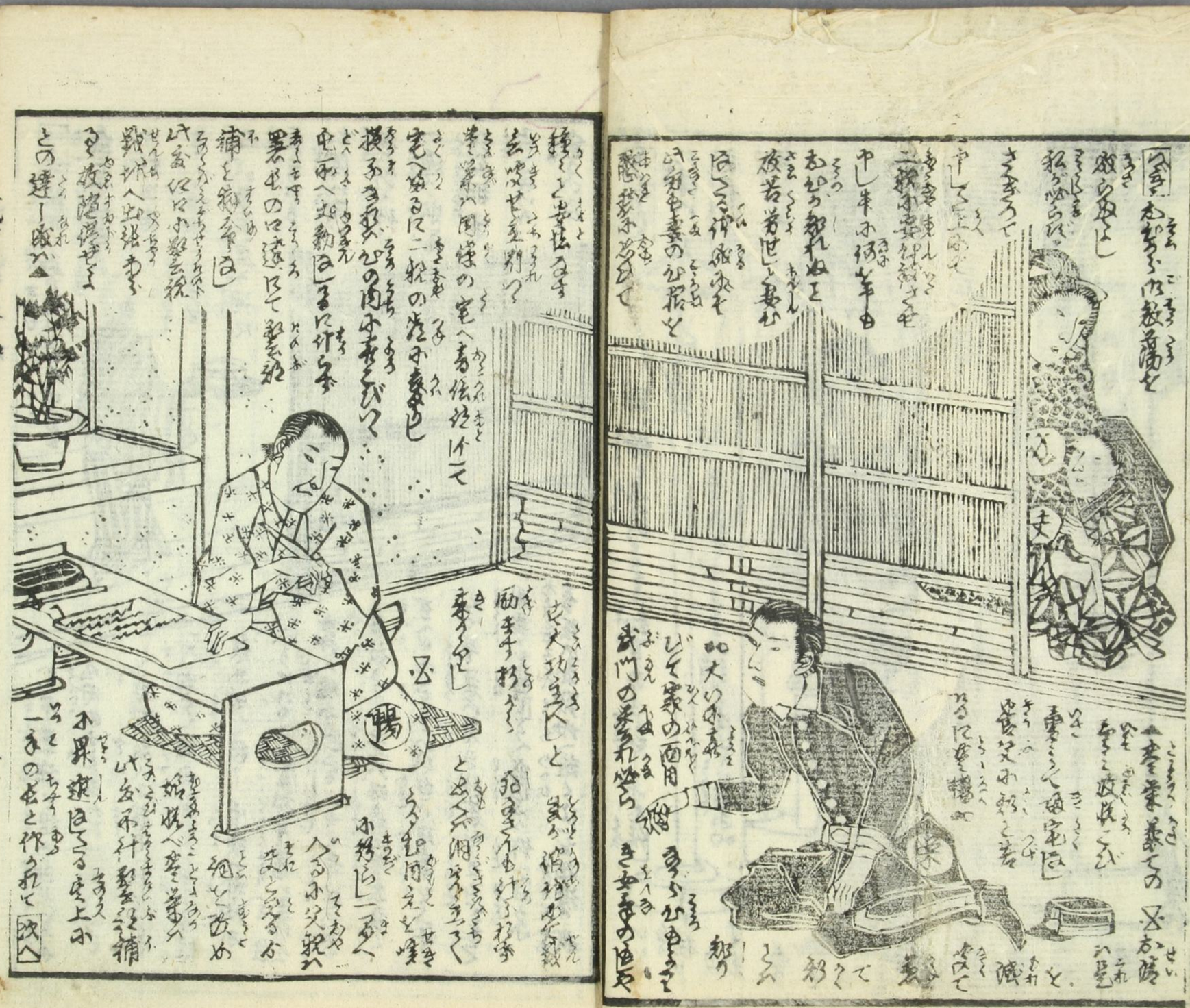
中之巻

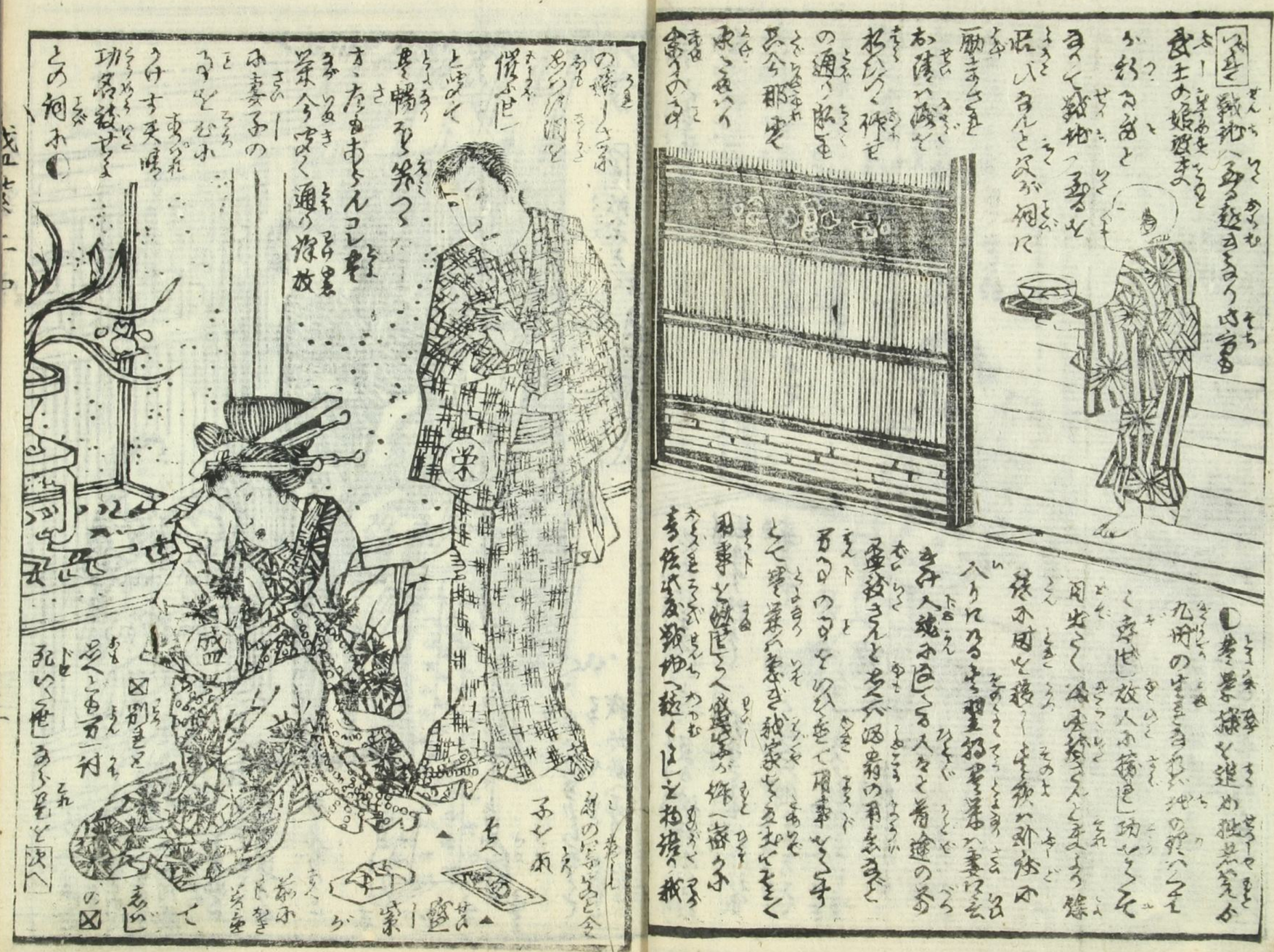
小廊也

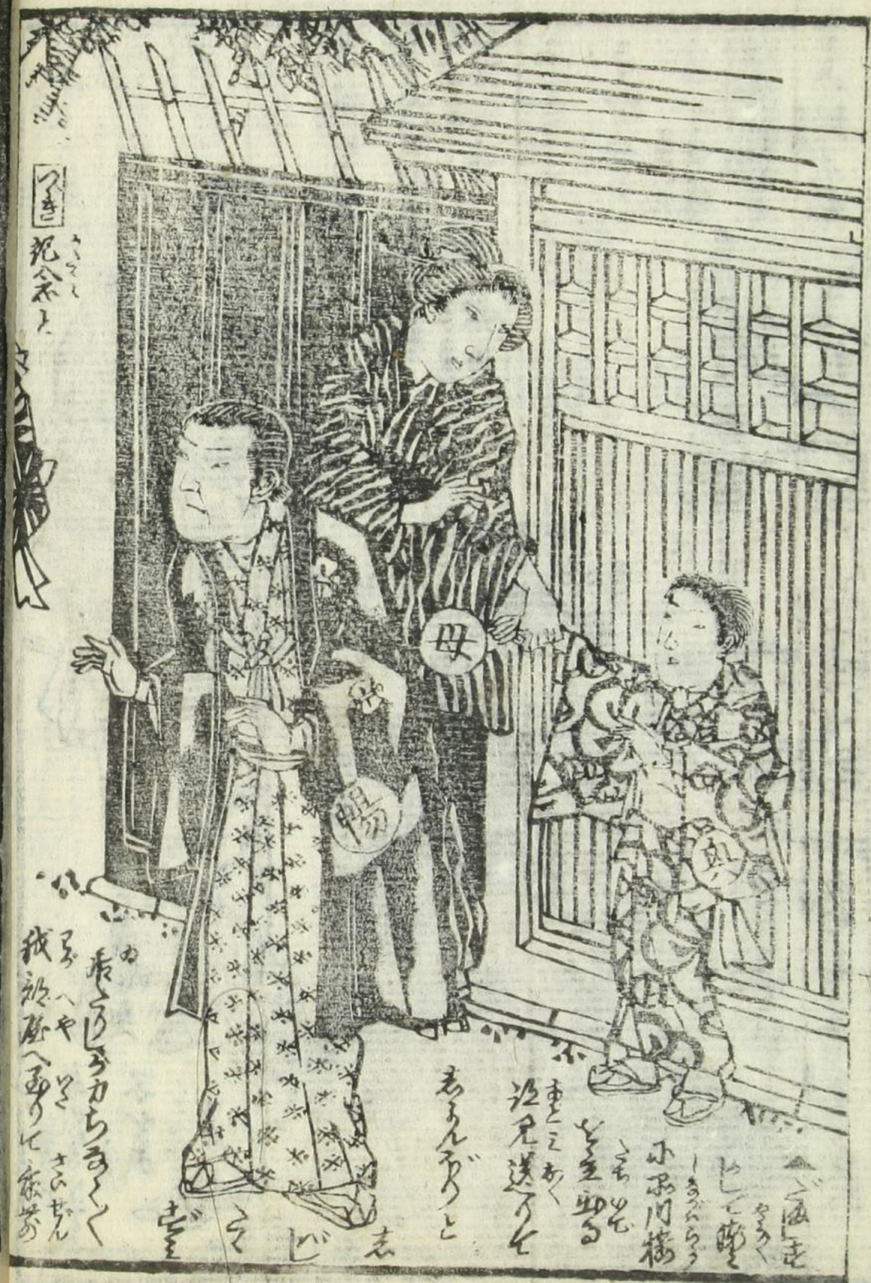
陸奥

海中



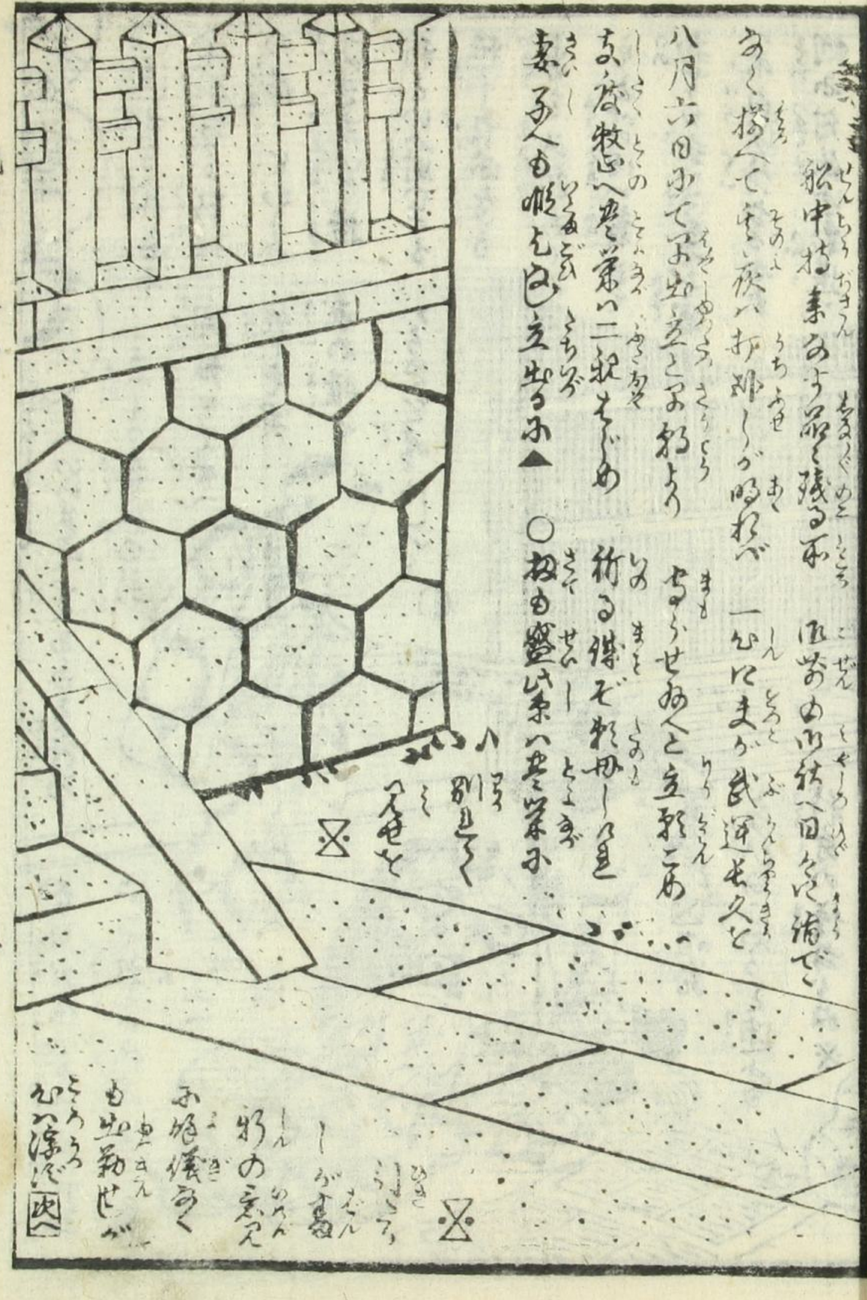




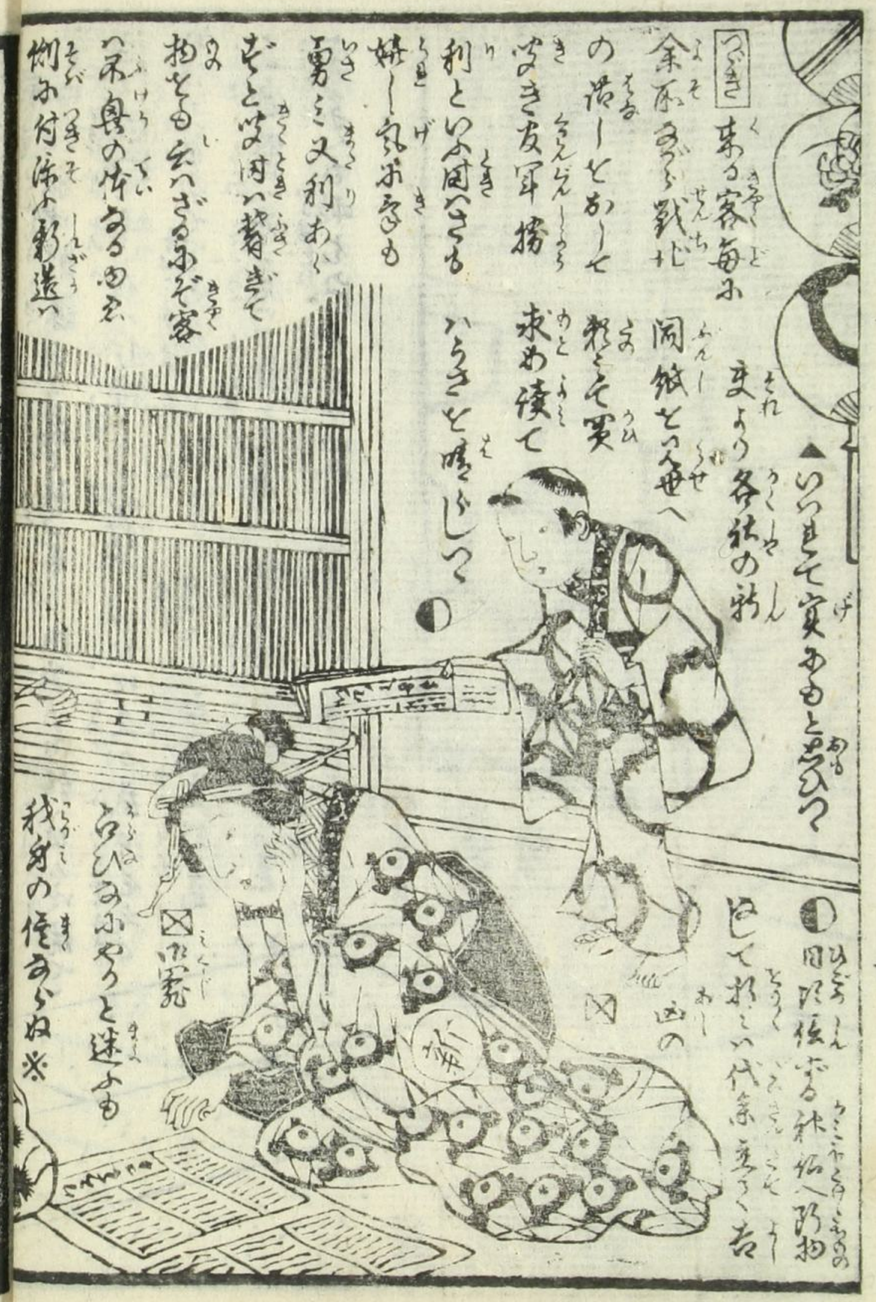

母

栄
せ

つゝき
一月八月途
と祝し
家
内一月遊ス
の祝ニ
甲斐ニ
二人
汁の
ど
ち
と
栄
牛の



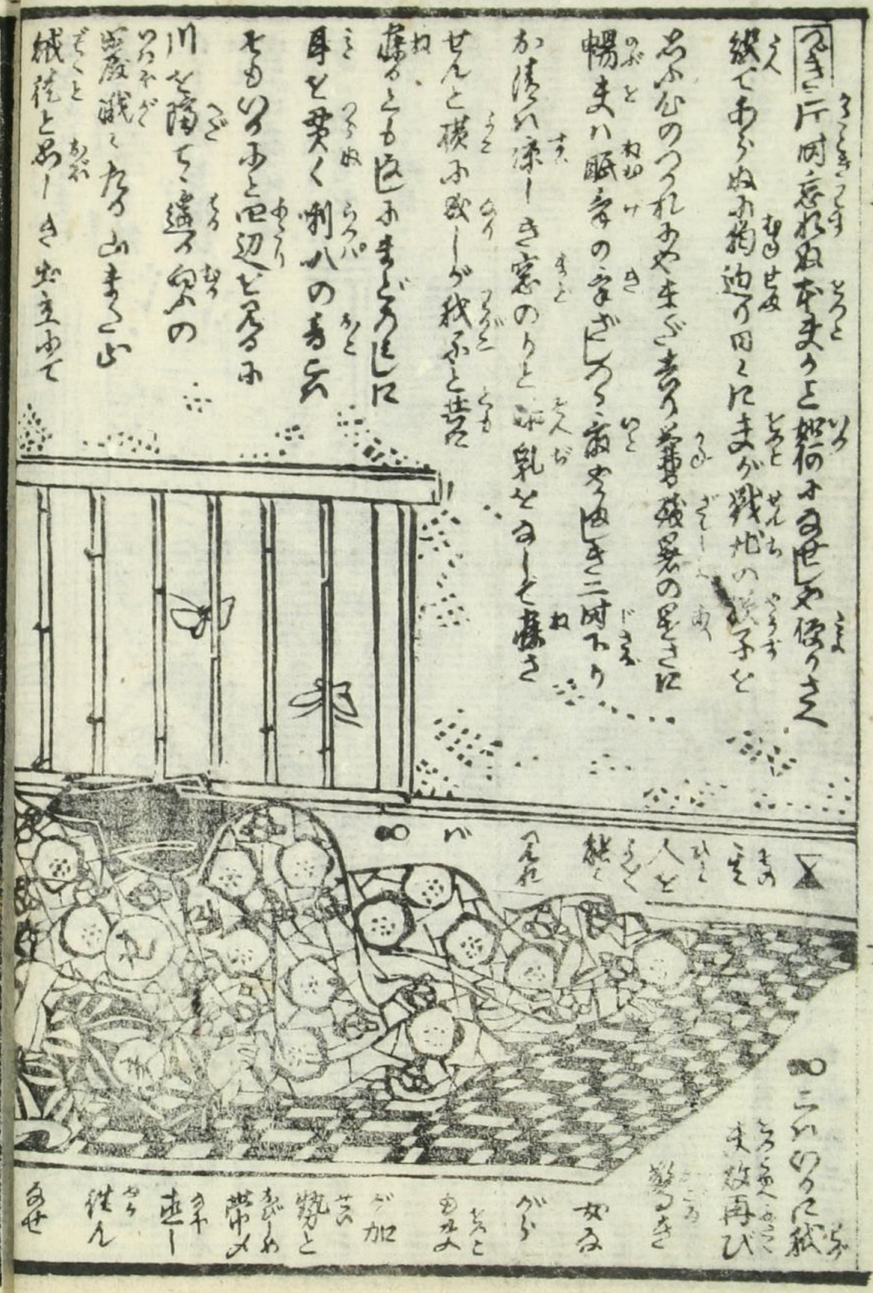
八月六日
ち
と
立
ふ
八



▲いつまで寅あもとあひつて
支よう各社の物
つぐき 来る客毎ふ
余原ぶつ戦北 同紙とう世へ
の借しとあしと
ぶき皮軍搗 求め後て
利といふ団ぶさも
姉し気ふ多も いらさと時ふして
勇さ又利あく
ぎと学問い背きて
拒とも云ハざるふぞ客
ハ不良の作なるゆえ
例ふ付作ふ彫遣ハ
残身の使あらぬ※
ひみふやうと迷ふも
◐ 日限伝ぶる社伝へ防拒
じて新こい代条変く古
山の
図

ひとい高金ふ
ふい借しと給
ら一社と給ひ
家ハに変ふふ
ぶるハそと
業じて表み
さんすふふ
寧と客人に
ぶふよう
んが
新写と
ち変
ふと
※
新ぬの
身と
らそ
れ
問
む
丹
茶の妻の大清
白毫夜共 次へ

つき二斤同忘れぬまうと紙の方色々使うさ
紙であらぬ物迫り出くれまり戦地の様子と
ふふ公のつれあやまぶ者戦場の様子さに
暢夫ハ眠家のまざしろ薄々色き二付下り
お清ハ涼しき窓のりと赤乳をゆしと嘆き
せんと横ふ蚊しが我ふと共
嘆くも色ふまどろしに
身と共く刑八の者云
もものふと四辺とるふ
川と隔て遠ス処の
霧戦くあるかまるよ
紙花とあしき出主ゆて



○この内に紙
まは再び
鬱つき
如ふ
ぐら
ちと
あれ
加
勢と
あぶれ
帯メ
ネ
赤ー
ゆ
ん
色せ

各々自ハ
者人の壮人中ふ
八方よりて切とる
と彼者者ふ共
共に
彫られ
彼

しが
大ぬ
とへぶ
ちーと
見ふ
つきき
翼
気
波
り
かく

つぎ
のうぶい
▲雲霧
へ藤雄
蔵く生こ
業とこ
戦ひ右
の糸
一個の歌
ゲ操出す絵き
んと成て雄の
業小ぶ重辺
らーしろる

此所の画ハ
花清が夢の
さめと見さ
まゆゞ
さんと
ゐと
あと
ア
揚頭
如何ゐと
思ふ内裏寡
歌するゆと沼
ぞ沼ゆくゐ
切ゑゝ
あゆやとえ
るゐに▲
入るゆぞ
一金入沼
の
遥

つぎ アナヤと義を正し
ゝべ次の雑義不世説
が種地巳て清ち
しが変に敷る
き意事のお清
くと呼さるすにハイとちゝて
起上り傍り元旦に臨様る
姫が挨ふるより母ハむ付変
あど見しやと見られ
お清ハ裏く狗拉ト
ありしるとゞもつぶ
さふ芸れべ母も

図 義しゝろ谷とのふ字の
人と義せべ刎めの八々の
二字ゝり又落のの字のせと
ゝゝらば洛とゝる
定字ゝり
洛ハ刎ハ
ゝゝと漢故
必らば故人
発統する
ゝれさぶるふんと刎と
せゝて解ゝるふぞ

俱々敷るきて兵
事あゝ此お清
とゝ本夫の刎へ
体色ゝて変の
ゝ本と扨傍る
変
暢
意
考久
て

▲お清ゝ変と
判ゝるふ変業谷く 図

お清とはしめ母
もゝ 安楽図
時ゝ乗るふ秋の
日の子変ゝて
門の戸と
吳さんと
図
署
のふ
ゝひと知ゝとて 次へ

北廓花盛紫　三編　春亭史彦作　梅堂國政画

滋賀縣美談　今常盤布施譚　三編　松林伯圓綴　梅堂國政画

雪月花三遊新話　三編　篠田仙果錄　梅堂國政画

書物地本問屋　東京日本橋區松島町壹番地　松延堂大西　伊勢屋庄之助版

梅堂國政画

下之巻

壺
茶
えびん
安寿つぐる
國政画

つゞき

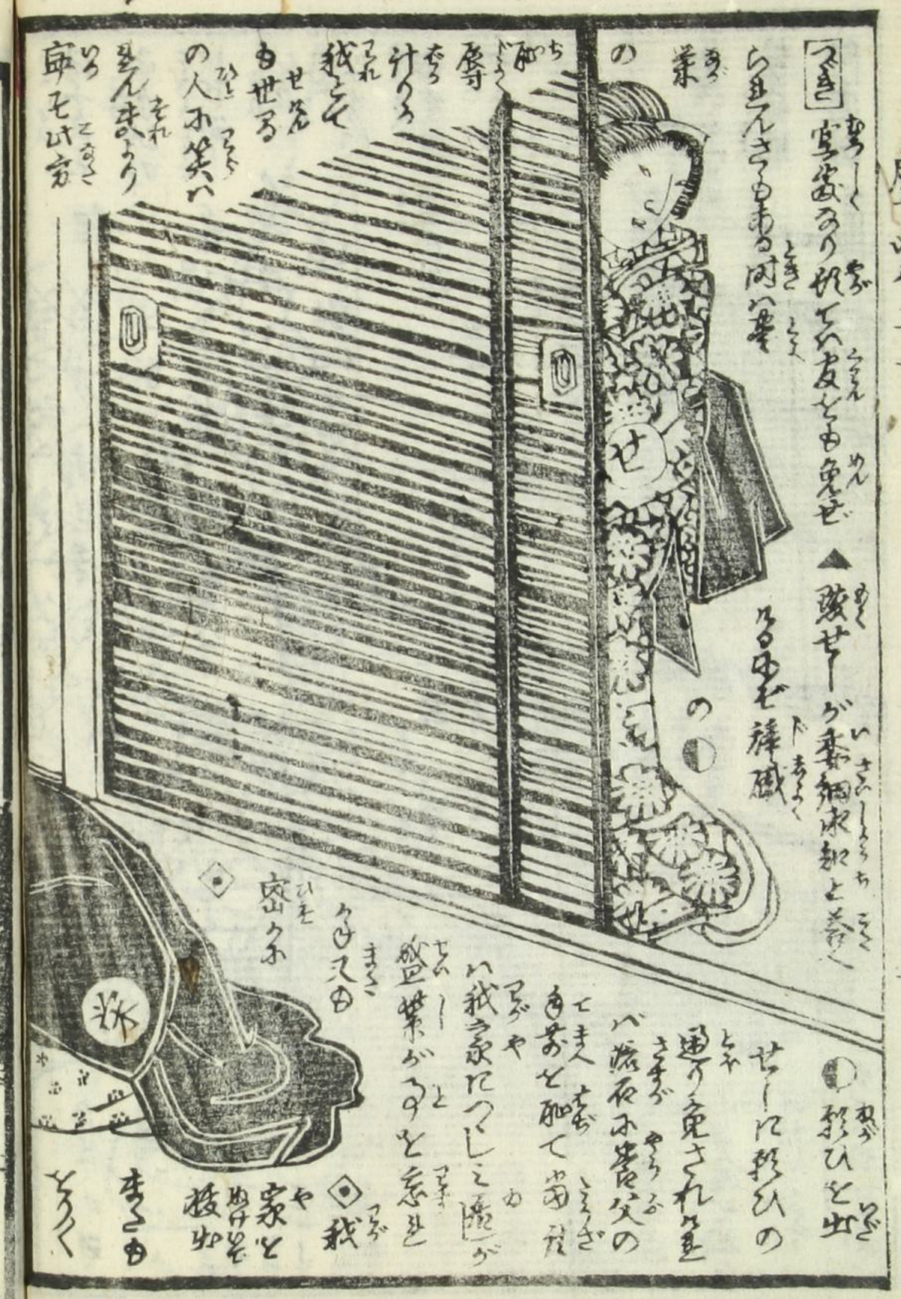
我藤旅芸奈児治を出帆して
海上の紙合もよく月中よ
めでたく浦府をば
臣るゆゑ家内
の喜び大うこと
らび藤小五郎
人和美手妻の
娘ら小甲斐乗り
て来ぶ者ども
新とをて並立
ぞくの嫁しさる
二人の手伝も悦

ゑぐ
〜く
海者と
拍ぬ〜
お親臣め
妻ふとも小
まと振して藤地
の規勢ゆゑ
藤つ間ひつ夜を民藤ぞ郎
無ふうりける義次の日より

ともに門より旅ぞの
遅び見送ぶ
のそくと一ト目へほひ
入りるふ二人の呪
も五如て寄りの
夜雨を祝ーるぶ
栄へ常へをと
つゝ生滞り
ふく立寄り礼義を
のべ戦地ゆてあひ
どもの一つゞ物語り
すの手門に妻と

業へ我彩り
日もある
故日これ
異人如訳
は粥く
隠とるう
〜へ品川橋へ
寄伝ふ蜜業い
日夜業の
ふ系ふく寄り
田舎山上ふく表こび
へる浦の数と

つぎ
栄



つぎ 宝家ありて娘を友とする男ゼ ▲ 跡せーゲ妻細次郎と義人
らるとんさるもある間八妻 るるゆゑ 薄藏
の 業
せ の
せーに移びの
通り免されな
べ流石ホ客父の
人を脚て出発
い我家につしこ魔が
盛業ゆゑと忘れ
◎我 家を
密クホ 接如
庫モ計方

通ひぶ
果ハ沢あ
ホ詩塔り今
い我めも紋さひべ雅ホ
悔る而もるく猪名乳
ずのるアとと
る い
妻の素つ
入ビ素変
花見の桜びに古清
い深く知をいこ
家うに又ホ云
おおく
い生ら又のおい
次へ
ト
舞藏とるさべ名義も立ち又
二ツホハ妻ト業が迷ひも少ーハさめる
ゆらんとあ妻を宝めを業の
移るを猪て一男ハ呼び見とこの
ホ身指とるらべ世男の使も
ある故に藏
歌ちべーと
狂をせめて
浦る歩ホ
と業を身の
清りホ一云の
義ハしるべ

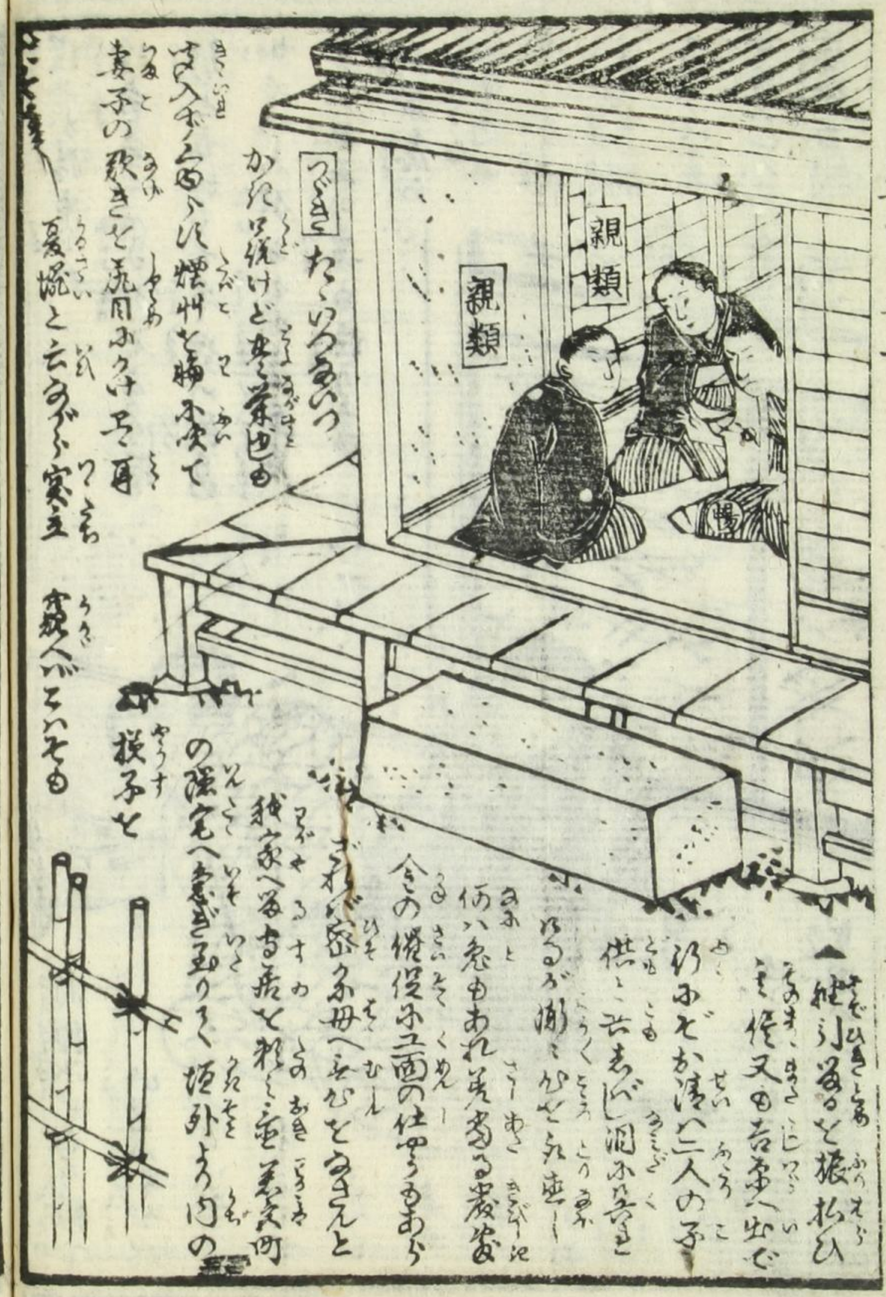
栄
せ

つぎ 立出つて車と雇ひ乗せて
去ればこそ乗り易き彼の幸とも
宣き賀門は家門の扱合も
悪敵本妻が門外の備物不残
内の秘蔵を道具まで奪
て返金の
れど毒薬と
知る家従身に
入用も惜む
備箱の頭使を
つむ使も多く
果は農業催

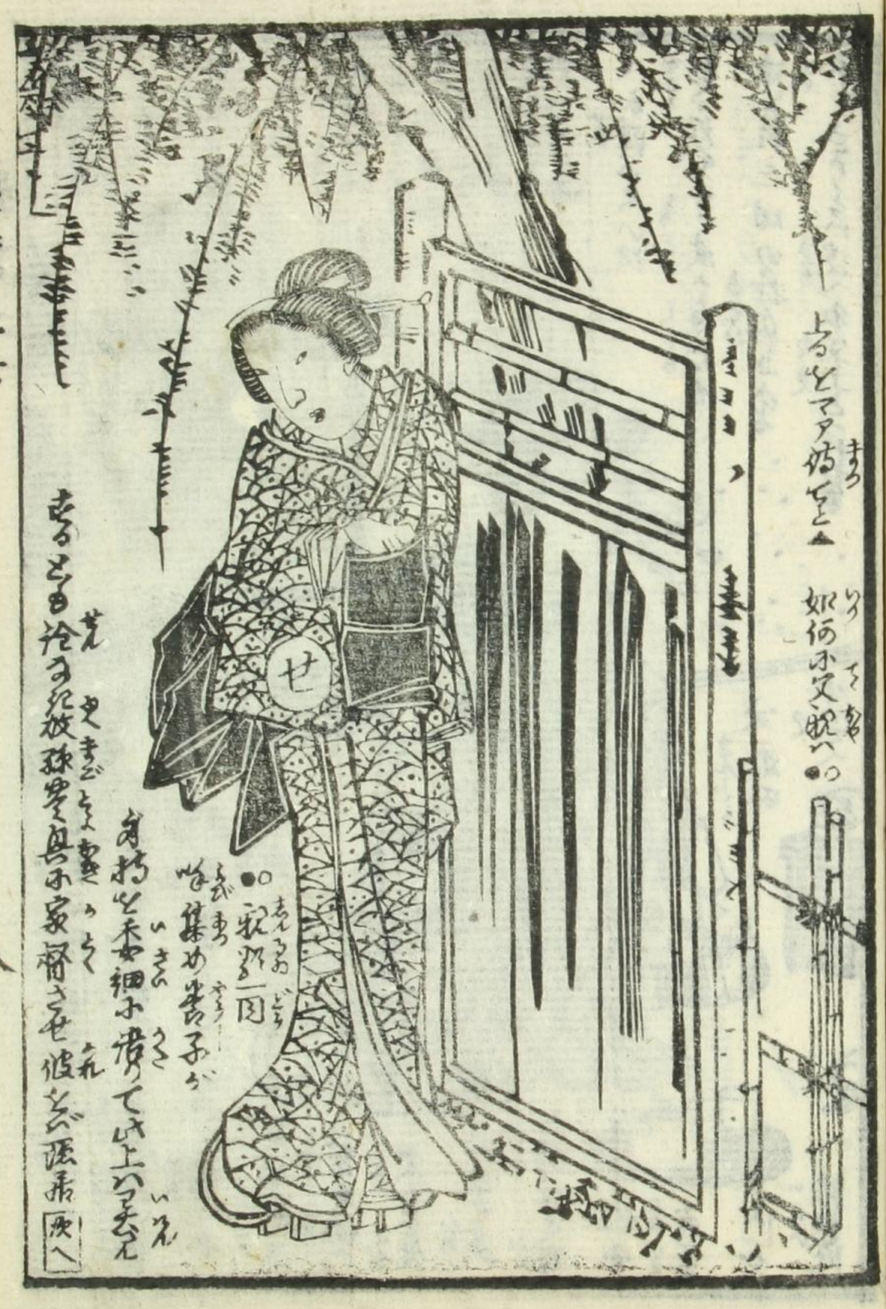
☒ 然とあれ ◐ 嫁きとさて
ぐらんせ今は
れど母親
そとかひちや
共に湖に行
多う笑さ
仮奉こと
ふい家門に
来てよとい
さへ出ぬ
かくさをいひて
ちぐり嫁くみぞ
お共は眼も白
ひも濡えせき行

但ふか清も今は
冷方なく湖の外ぞなりに
彼とも彼らで先は例の
如くかろ砕ふか嫁姿立度
思ひ流石の妻も怖りて
久安度ら
ぬを門ふ
内ーふ共
兼ど立湖
あるかぬに
ふ行ぬ
見ぬを
ぬ見ぬ二人の
ふ供も ☒

湖約ふせあり仮合
比身はかかに
久ふは敵さの
あるふもせ
よアレ
あの
通り
二人の
ふ供ぬ
むを不
後とあれあさべれ対を
黒図ふ色ぬれと 次へ



▲紙引巻を振払ひ
其又四古参人出で
行ふとか清へ二人の子
供と云ものし泥ふ見き
るが潮さかと丸亜
仏ハ急もあれ美者る家業
今の俳優ふ二面の仕事うもあら
ずれば家ふ母へ家ひとをきんと
我家へ出古来と粉しく亜美文河
の強色へ意ぎ乱りく姫外ふ内の



上るとマア俗ちと
如何ふ又脱へ
●釈迦一図
峰集め業子が
身持と未女細ふ潰りて上ハ
る捨ふ死故孫男と真ふ家督さを彼

史彦作
國政画

御届 明治十四年 四月二十一日
浅草馬道十六丁目二番地
編輯人 吉田嘉雄
松島町一番地
出版人 大西庄之助

北廓花盛紫 三編 春亭史彦作 梅堂國政画

滋賀縣美談 今常盤布施譚 三編 松林伯圓綴 梅堂國政画

雪月花三遊新話 三編 篠田仙果錄 梅堂國政画

書物地本問屋 東京日本橋區松島町壹番地 松延堂大西 伊勢屋庄之助版

010190513705